

令和 2 年度
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
 成果報告書

団 体 名	小美玉市	
施 設 名	四季文化館 (みの〜れ)	
助 成 対 象 活 動 名	普及啓発事業	
内定額(総額)	3,436	(千円)
公 演 事 業	0	(千円)
人材養成事業	0	(千円)
普及啓発事業	3,436	(千円)

(1) 令和2年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	
1				目標値	
				実績値	
2				目標値	
				実績値	

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(2) 令和2年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	
1				目標値	
				実績値	
2				目標値	
				実績値	

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(3) 令和2年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場			
1	学校芸術鑑賞事業	①小学校芸術鑑賞事業 令和2年11月2日※ ②中学校芸術鑑賞事業 令和2年12月2日	①演目：総合エンターテイメント 出演者：TAP DO! スタッフ：みの～れ支援隊 ②演目：クラシック、オーケストラ 出演者：東京室内管弦楽団 スタッフ：みの～れ支援隊	目標値	1,400 (鑑賞会参加小中学生 912、一般 420、吹奏楽クリニック 68)
		四季文化館みの～れ		実績値	433※
2	学校アクティビティ事業	①学校アクティビティ 令和2年11月～12月※ ②集大成コンサート 中止※	①演目：和楽器演奏、体験 出演者：長須与佳、琴佳、岩田卓也・伊藤、code” M” ②集大成コンサート 新型コロナウイルス感染症のため中止	目標値	1,750 (学校アクティビティ 1,200, ミニコンサート 50, 集大成コンサート 500)
		小美玉市内の幼稚園・保育園・小学校・中学校		実績値	439※

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p>
<p>文化芸術基本法第4条では、地方公共団体の責務として、文化芸術基本法の基本理念にのっとり、国と連携を図りつつ、地域の特性に応じた施策を策定し、実施することを求めている。さらに市は『小美玉市公共ホール条例』を定め『市民の文化の振興及び教養の向上を図り、もって福祉の増進に資するため』の施設として公共ホールを位置付けている。市直営のホールである四季文化館みの〜れには市が行うべき文化芸術施策の核としての役割が求められている。市民が生活圏内においてできるだけ負担の少ない形で文化芸術を鑑賞、参加創造することができる場としての役割はもちろん、企画運営にあたっては文化芸術に関わることが困難な層に配慮しこれらの層が文化芸術を創造し享受する機会を提供することで、福祉の増進へも寄与していく。また地域の将来を担う子どもたちを地域全体で育てる連携の輪に加わり、市内の児童生徒に文化芸術体験を等しく提供することで学校教育、さらには経済格差が生じやすい家庭教育を補完する。</p> <p>その観点から当初は予定通り、市内の小学校・中学校への鑑賞事業の計画と小学校・中学校に幼稚園・保育園を加えたアウトリーチ事業を進めるため、市内学校の校長が集まる校長会での事業説明や館が主導して各学校・園の代表の先生が集まる文化教育検討委員会を組織し、事業の趣旨や目的を説明し開催に向けて動いていたが、新型コロナウイルス感染症の影響で6月に予定していた芸術鑑賞事業の小学校の部は内容を変更し11月へ延期し、12月の鑑賞事業の中学校の部は何とか開催ができた。アウトリーチに当たる学校アクティビティ事業では、コロナ対策を各学校とアーティストと密に連携を取り、可能な限り感染拡大防止に努め実施の検討を進めていたが県独自の緊急事態宣言により開催自体が困難となった。事業自体は適切であったと思う。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p>
<p>文化的意義：鑑賞事業のアンケートを見てみると「本物を生で鑑賞できることのありがたみを感じました」等の先生の感想や、「とてもすばらしい演技でした。ぼくは今日まですごく練習を重ねてきて努力をしてきたとおもいました。じゃないとこんなすばらしい演技はできないとおもいます。ぼくは感動しました。」と生徒の感想から、少なくとも鑑賞した対象者には、感動や本物を生で観ることでしか味わえないライブ感を感じてもらえたようだった。アクティビティも同様で、使用する邦楽器の歴史的な説明もアーティストが丁寧に説明しているので、受けた生徒達も興味示し理解している様子であった。</p> <p>社会的意義：誰にでも公平に文化を享受してもらおう観点でいえば、鑑賞事業小学校の部ではコロナ禍ということで鑑賞料無料で本人たちの自由参加にした。中学校の部では授業の一環として開催し、劇場マナーを学ぶ場を創作した(座席表を見て自分で探す。もぎり体験を語る)。また、アクティビティ事業に関しては学校の授業ではあまり触れる機会のない邦楽器をメインに開催。時には体験で実際に楽器に触れて、音を鳴らしていた。日本古来の楽器を歴史的に教えることで楽器への理解をより深いもののできている。</p> <p>経済的意義：日頃文化に触れる機会のない子どもたちにも平等に鑑賞してもらおうことで、文化に興味を持ってもらう機会の創設になっている。アクティビティをきっかけに日本の楽器を始める子もいると担任の先生は語ってくれているので、事業の継続が子どもたちの文化の入門につながっていると考える。このことは、知識経済化、サービス産業への移行等、産業構造の変化を受け、物質的な充足感による消費経済社会から文化芸術による心の充足感、文化資源が経済成長の源となるニューノーマル社会に向けての新たな市場を生み出す源泉になる重要な役割を担っている。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

当初の目標では鑑賞事業・アクティビティ事業に参加対象となる学年について、市内すべての学校・クラスが参加することが目標であったが、新型コロナウイルス感染症が流行したため叶わなかった。

学校芸術鑑賞事業(小学校の部)

当初は6月に市内の全小学校6年生の参加を予定していたが、新型コロナの影響で一時中止の意見もあったが文化教育検討委員会と児童を対象としたアンケートの結果、開催への強い希望もあり11月に自由参加という形でなんとか開催できたが、11月は依然としてコロナ禍であり市内6年生416人中18人(約4%)の参加にとどまった。しかし参加してくれた6年生のアンケートを見ると、どの子も楽しんで観てくれているようだった。

学校芸術鑑賞事業(中学校の部)

こちらは当初の日程通り12月に開催することができた。東京室内管弦楽団を招き、中学校2年生を対象にしている本事業は、事前に吹奏楽向けにアーティストが直接学校に出向いての楽器の理解を深めるクリニックも併せて実施した。当日の公演は市内の全中学校2年生494人中396人(約80%)の参加となった。残りの20%は感染症予防の為辞退という形となった。参加してくれた生徒からは「コロナ禍で芸術に触れる機会がない中、クラシックコンサートは感動した」とのアンケートもあり文化振興の効果は得られた。

学校アクティビティ事業

アーティストが現地に出向くという性質上、学校の先生とも直前まで開催についての調整が続いていたが、感染症対策を徹底するという形で開催することができた。具体的にはソーシャルディスタンスの徹底、マスクの着用、体験時は消毒の徹底、MCの際にはマスク・マウスガード・マイクガード着用の対策をした。ソーシャルディスタンスは徹底したが普段のコンサートより断然近くで邦楽器を聴いたり体験したりができるので、子どもたちや先生からは機会の提供について感謝の言葉をいただいた。中には邦楽器の楽しさに触れて教室に通い始める子もいたとのことであった。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

学校芸術鑑賞事業(小学校の部)

事業期間は各学校に都合のつく日程を確認して、前年度から調整はしており適切であったと思う。文化教育検討委員会で日程は適切か、来年度は変更して欲しいのか確認しており、要望があれば調整する体制は整っている。しかし、令和2年度の小学校芸術鑑賞事業に関してはコロナ禍の影響で参加率は4%と落ち込んでしまったのでその意味では計画通りには行かなかった。事業費に見合ったアウトプットでは無かったのかもしれないが、鑑賞者のアンケートをみると、エンターテイメントショーの公演は生で触れる機会がないので継続してやって欲しいとの要望は少なからずでており、文化に触れる機会の提供という部分では非常に価値があったのではないかと感じている。

学校芸術鑑賞事業(中学校の部)

こちらも事業期間は小学校の部と同じように文化教育検討委員会にて日程調整しており、中学校の意見をくみ取りながら事業実施をした。クラシック自体は学校の授業でも触れる機会が多いであろうが、やはり授業のCDとは違い生のコンサート演奏なので一回の公演で得るものは大きいと思う。合わせて楽器の説明をするクリニックの授業を行っているので事業費以上の見合った内容を提供できている。

学校アクティビティ事業

事業期間は11月～2月の間で各学校とアーティスト間で日程を調整している。市内の全学校・幼稚園・保育園を対象に4アーティストから選択しているので、各学校・園の要望に沿っており事業費も金額に見合った内容、時間になっている。事業自体は当初は計画通り進んでいたが、1月の県独自の緊急事態宣言の影響で事業自体が延期からの中止となってしまった。住民に公平に文化を享受してもらう観点からいえば、開催したところとしていないところで不公平を生じさせてしまったが、通常通り開催していれば邦楽器体験や生の音を近くで聴くことができるので、非常に文化の醸成に一役買っている事業である。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

四季文化館が立地している地区は、以前より住民参加によるまちづくりを目指していたことから、ホールの建設計画の段階で、住民による検討委員会やシンポジウム等が行われた。これらに関わった住民を中心に、開館後は、館の方向性を検討する委員会、実際に行われる事業の企画運営を行うプロジェクトチーム、広報や客席案内等を担当するスタッフ部門などが次々に組織され、館も住民の一人、住民とともに成長する施設として運営が行われてきた。

こうした施策が評価され、四季文化館建設中の2000年において、当時の町が建設省「対話型行政推進賞」を受賞したほか、開館の7年後には「地域創造大賞・総務大臣賞」を受賞している。

現在も館の運営に住民は不可欠であり、町村合併により現在の小美玉市となった後も、そのあり方は市の文化芸術施策に受け継がれている。

劇場・音楽堂が地域の文化拠点として機能を最大限発揮するためには「住民」が必要である。市内の生徒もちろん住民の一員であり、学校鑑賞事業はその生徒の成長も目的である。学校事業の公演のスタッフは全て住民のボランティアスタッフであり、客席案内・もぎり・受付まで研修を受けたスタッフが公演を手伝ってくれている。学校事業の対象の生徒達が四季文化館での公演を体験して、文化芸術未経験層が少しでも興味を持ってくれれば文化の根が地域に根差して、その子が大人になった際、文化創造、発信に携わる地域人財や、四季文化館のボランティアスタッフとして後世に文化を伝える人間になってくれる文化の好循環サイクルが生まれる。

公演の特徴としては学校鑑賞事業(小学生の部)「TAP DO!」は、笑いの要素も取り入れ児童が楽しめる公演を行っており、毎年好評を博している。(中学生の部)の出演者からは、演奏会のみならず学校に直接出向いての吹奏楽クリニックを実施いただく。東京室内管弦楽団という非常に高い水準の音楽を生でホールで聴けるのが特徴。学校アクティビティ事業は対応や息遣いの感じられる距離で本物の演奏を聴かせることをコンセプトに本市では「邦楽器」に重点をおき子どもたちが日本文化を国際社会に発信できることを目指している。

文化の情報の発信については館のSNS(Twitter、Facebook等)を活用して公演について周知活動に励んでいる。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

学校芸術鑑賞事業(小学校の部)に関しては小美玉市の元文化創造コーディネーターである廣田善一氏(通称:ポケ)が代表を務めるTAP DO!というパフォーマンス団体によるエンターテイメントショーを開催した。廣田氏は、市の元文化創造コーディネーターということで文化事業の中でも特にエンターテイメントの関する分野で助言や指導をしていただいていた。市の文化振興の目的や長期的な文化ホール計画を理解した上で、鑑賞事業を展開してくれている。

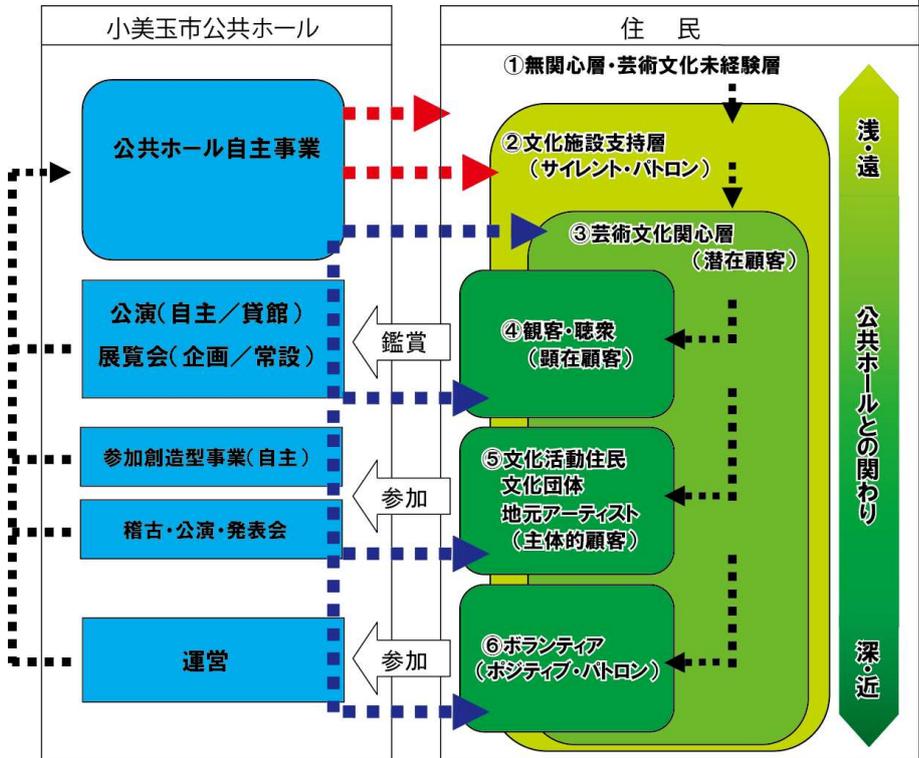
学校アクティビティ事業は「邦楽器」をメインにしており、各学校が4組のアーティストから選べるように調整している。(アーティストの都合で希望が通らない場合もある)。学校側の要望で体験の方法や、希望曲を確認しアーティスト側との調整をしているのでアウトリーチであるアクティビティ事業はとても高評価を得ている。今年はいえなかったが事業に対する住民の認知と理解を深めるため住民向けにアクティビティ事業のアーティストが一同に介しコンサートをする「集大成コンサート」を予定していた。住民の方が見に来てもらいやすいようにチケットを低価格に設定し一般販売しており、アクティビティ事業の説明やアーティストの紹介も含めてアナウンスすることで小美玉市の文化振興の発展に寄与している。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

小美玉市まるごと文化ホール計画では、事業展開のイメージとして右図のような文化のサイクルを想定している。社会的機関として全住民にどうアプローチしていくかを考えたとき、文化ホールとの関わりが浅いか遠いか深いか近いかで6つの層に分け、それぞれの対象に焦点を当てることで文化のサイクルが生まれるとした。①無関心層・文化芸術未経験者層に対しては、文化ホール側から対象者のところに向向っていくアウトリーチ活動が有効であるとし、学校や福祉施設、地区公民館を利用した事業展開を図っている。アウトリーチはこの層が



文化芸術に触れ、②文化施設支持層や③芸術文化関心層に変化、また自ら出向いての文化芸術体験が困難な層が文化芸術に触れる機会を提供することで、文化の根が地域に根ざしていくことを目的としている。さらには、文化芸術関心層がホールに来ることだけを想定した従来の事業展開ではなく、無関心層に積極的に働きかける攻めの姿勢を必要としており、児童生徒等に平等に文化芸術体験を提供する事業などが、この目的に沿って計画されている。最終的にこれらの事業展開により「小美玉市まるごと文化ホール計画」のビジョンである「根を張ってこそ花が咲く」、持続可能な豊かな文化のまちの実現を目指している。

その意味で学校鑑賞事業・学校アクティビティ事業はこの持続可能な文化のまちにするために必要である。今後についてはこの事業を継続していく意思はあり、いくつか課題もある。人事戦略に関しては行政特有の人事異動が毎年あるが学校関連事業は正規職員4人チームで運営しており、4人で内容や運営方法の共有をしているため、誰が異動しても誰かしら経験者は残れるような体制を整えている。公演を支えてくれる公演スタッフは要請があればスタッフ研修も設けて、スタッフとしてのマナーを集約した「おもてなしBOOK」という冊子を作成し、初めてスタッフをする職員、ボランティアへ配布している。現在登録数は155名だが増減については最近横ばい傾向から微減となっている。今後のボランティア運営についても対策を練る必要があると感じている。

学校事業についてのPDCAサイクルについては、主に文化教育検討委員会にて行っている。企画内容の検討に始まり、事業説明したのちに実行。各学校の先生と生徒に向けてアンケートを取っている。そちらを集計し、再び文化教育検討委員会にて事業の検討の資料としている。各学校の先生から毎年改善案も出ており、その度に改善している。今後も現場の先生の意見を取り入れつつ、文化振興の柱としていければ持続的な発展が可能である。